

中学校と高等学校における新たな家庭科教材の提案

清水 佐知穂

三好 絢子

[指導教員：武庫川女子大学講師 末弘 由佳理]

キーワード：家庭科教育，中学校，高等学校，教材開発

1. 研究背景

我々はそれぞれ中学校，高等学校の家庭科教員を目ざしている。4年間教職を学び，教育実習で実際の現場の体験を通して，教材研究の大切さと難しさを身をもって感じた。生徒に伝えたい内容を確実に，わかりやすく教えたい，そのような思いから，中学校と高等学校の家庭科の授業の現状を理解し，よりよい教材の提案について研究するに至った。また，この研究の最終形としては作成した教材を使用した授業実践であるが，それについては我々が卒業後，実際に教壇に立った際に生徒たちを相手にこの提案する教材を使用して教授することで効果を確かめることができる。そこで得られた結果をもとに改良等を行い，生徒に合った教材に変えていきたいと考えている。

2. 研究の目的

文部科学省は，2008 年 3 月，小・中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領を，2009 年 3 月，高等学校・特別支援学校の学習指導要領を改訂した¹⁾。本研究では，新学習指導要領のポイントとして挙げられた中でも，「体験活動の充実」と「伝統や文化に関する教育の充実」¹⁾に着目した。前者は社会，自然や環境の中での直接体験のきっかけづくりを行うことが挙げられており，後者は郷土や文化について理解を含め，その良さを継承，発展させることが挙げられ，その中で中学校の家庭科では，和服の基本的な着装などの学習を組み込むことが例として挙げられている¹⁾。

これを受けて本研究では，中学校向けの教材として，和服の基本的な着装を教授する中で和服の構成をわかりやすく生徒に伝えることを目標に「和服の構成を教授する際に効果的な教材の提案」を行い，高等学校向けの教材として，授業内での体験活動に着目した，生徒たちの知識技能を定着させるために効果的な製作実習を目標に「被服製作実習におけるエプロン製作のための教材の提案」を行う。

3. 家庭科教育に関する調査

3-1 調査対象・方法・内容

(1) 中学校家庭科担当教員に対するアンケート 兵庫県下の 346 校の公立中学校の家庭科担当教員を対象に，家庭科教育に関するアンケート調査を郵送にて実施した。2015 年 7 月に送付し，平成 27 年 9 月末までを返信期間とした。返信率は 54.9%であり，有効回答率は 80.0%であった。

家庭科教育の現状を活かした，必要性の高い教材を提案したいとの思いから，家庭科の授業（実習を含む）の現状や，困難に思っていること，また和服の着装に対する意見等を調査した。

(2) 受けた家庭科教育に関するアンケート 10 代～50 代の男女を対象に，web アンケート，紙面によるアンケートを実施した。期間は 2015 年 6 月から 2015 年 7 月の 1 ヶ月間である。回答数は 679 であった。実際に今まで家庭科教育を受けてきた人の経験を調査して，そこで課題にあがったものを活かした新たな家庭科教育の教材を提案したいと思い，中学校・高等学校での家庭科の授業の習得度や被服製作実習の製作物，製作時の困難に感じた点，基礎縫いの定着度と使用頻度等について調査した。

4. 結果および教材提案

4-1 アンケート調査結果

(1) 中学校家庭科担当教員に対するアンケート 被服製作実習で重点を置いている事項について，「作成したものの実用性」が最も多く，生徒が今後の生活に役立つものを教材として選定していた。実習で扱っている作品には基礎縫いができるものという回答も多く，基礎の充実が求められている。また，家庭科の授業を行う上で困難な点では授業時間不足が最も多く，授業の効率化が求められている。和服の基本的な着装を教授する際に重点を置いている事項については「洋服との違い」「構成」「着付け」が多く（図 1），その際に使用されている教材は「教科書」であったが，今後使用したい教材では「浴衣（実物）」が最も多く，浴衣の形をした，和服の構成が学べる教材が求められていると推察した。

(2) 受けた家庭科教育に関するアンケート 中学校・高等学校の家庭科の被服製作実習で行った内容を覚えている人に何を製作したかという質問に対して，エプロンという答えが 350 人で最も多かった。また，家庭科の被服製作実習で困った事項では，図 2 のような結果になった。回答者 679 人のうち「特に困ったことはなかった」以外を回答した人数は 406 人であり，被服製作実習には生徒がより効果的に学べるような授業を行うための課題が残されていることがわかる。中学校・高等学校の家庭科の授業内で和服（浴衣）の着方や構成を覚えてもらえればよかったかという事項については 69.0%の人が「大変そう思う」或は「そう思う」と回答しており，和服の構成を扱った授業が求められていると推察した。

4-2 教材の提案

(1) 中学校向けの教材「和服の構成を教授する際に効果的な教材の提案」 反物から残布が出ることなく和服が出来上がる、また和服特有の直線のパーツのような和服の構成が学べるように、それぞれのパーツが取り外せる教材を提案する。素材はフェルト、接着部分は面ファスナー（マジックテープ：株式会社クラレ²⁾登録商標）である。実際に着用できるように実寸大で制作している。生徒には反物の状態で渡し、それを生徒がパーツの数や形から完成図をイメージしながら組み合わせる（図3）。

(2) 高等学校向けの教材「被服製作実習におけるエプロン製作のための教材の提案」 授業の効率化と基礎の復習、文部科学省が定める学習指導要領に出てくるキーワードである繰り返し学習を充実させるために、エプロンの製作実習の前時に行う授業の教材としてミニチュアサイズのエプロンを提案する（図4）。素材は綿、色は白色で、それぞれの基礎縫いによって糸の色を変えることで縫製の違いを認識しやすくする。基礎縫いには義務教育内の教科書に記載されているまつり縫い、千鳥がけ、本返し縫い、半返し縫いの基礎縫いを取り入れる。

5. 結論および今後の課題

中学校向けの教材「和服の構成を教授する際に効果的な教材の提案」を提案することで、実際に生徒が主体性をもって和服の構成を学ぶこと、そして和服の構成を理解し、平面構成を学び、今後の様々な製作に活かすことを期待している。本研究では実寸で製作したが、その大きさから準備時間確保の困難や、学校に一つの教材であるということから、4分の1サイズを班毎に配るという方法が扱いやすいのではないかと考察した。また、和服は反物から作る際に無駄な布が出ないこと、体型が多少変わっても同じ和服を着続けられるということが特徴として挙げられる。このようなことから和服の経済性やエコに関しても興味を持たせ、和服を日本という郷土を重んじるきっかけにしたい。

高等学校向けの教材「被服製作実習におけるエプロン製作のための教材の提案」を提案することによって、被服製作実習（エプロン製作を取り扱う場合）の授業を実際に行う際、本教材によって実寸サイズのエプロンを製作する前段階として同じ工程のミニチュアエプロンを製作しているため、生徒が製作の流れを理解しやすく授業の効率化が期待できる。また、ミニチュアエプロンを製作して実寸サイズのエプロンを製作することで、本教材で取り扱う基礎縫いの繰り返し学習が可能となり、生徒が反復学習を繰り返すことで「確かな学力」の定着をはかることが期待できる。

本研究の提案教材は、実践的・体験的な活動を取り入れていることから、生徒が受け身ではなく、主体的、積極的に、かつ楽しみながら学ぶことができ、記憶にも残りやすいだろう。生徒たちがこれから生きていく中で「家庭科で勉強したことが役に立った」と感じることであったときこそが学んだ

知識・技能が意味のあるものになると考える。今後、我々は教壇に立ち、本教材を使用して実際に授業を行い、生徒たちの反応や効果をみて改善を繰り返していきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省 HP, <http://www.mext.go.jp/>
- 2) kuraray 株式会社クラレ HP, <http://www.kuraray.co.jp/>
 - ・鶴田敦子, 伊藤葉子: 授業力 UP 家庭科の授業[第2版], 株式会社日本標準, 2008
 - ・田口浩継, 竹野英敏, 佐藤文子: 平成20年改訂 中学校教育課程講座 技術・家庭, 株式会社ぎょうせい, 2009
 - ・佐藤文子, 金子佳代子ほか 59名: 新しい技術・家庭 家庭分野, 東京書籍株式会社, 2013
 - ・呑山委佐子, 阿部栄子, 金谷喜子, 木野内清子: 図でわかる 基礎きもの, (株)おうふう, 2008
 - ・網野鉦一: 自分で縫う 自分で着る ゆかたの本, グラフ社, 1997
 - ・富田明美: 生活科学テキストシリーズ 新版アパレル構成学 着やすさと美しさを求めて, 朝倉書店, 2012

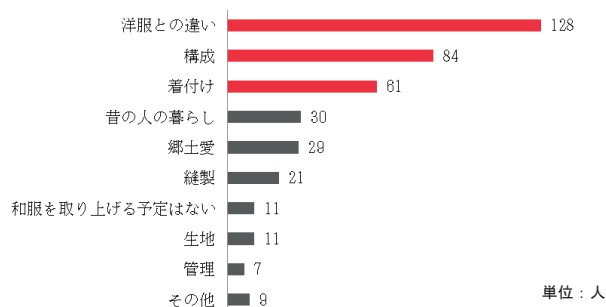


図1 基本的な和服の着装を教授する際に重点を置いていること

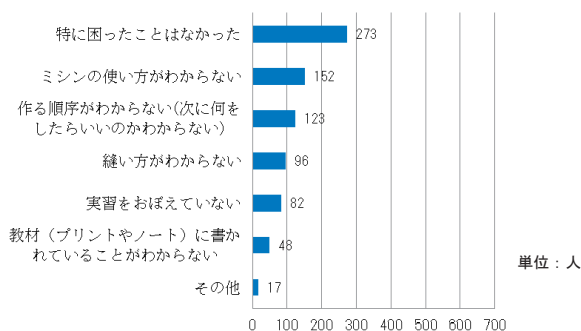


図2 家庭科の被服製作実習で困ったこと



図3 組み合わせ後の状態

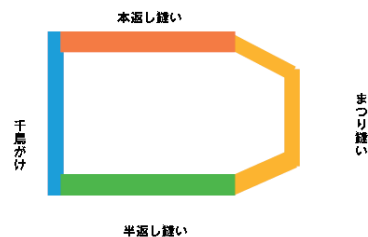


図4 ミニチュアエプロンの模式図